



表現者のコラム Vol.3 【観に来て欲しいのか？ 喜んで欲しいのか？】

演劇にとって、悲しい現実と嬉しい現実がある

演劇を含むライブ・エンターテイメントの市場規模は年々増加し、今や5,000億円を超えてるという。東日本大震災以降、消費者がリアルなつながりを求めるようになった結果、ライブ会場には、観客が群れを成して訪れているというのだ。…これは悲しい。その市場のほとんどを、音楽が占めているからだ。演劇も伸長はしているようだが、お金が落ちていく場所が歌舞伎とミュージカルと宝塚、そして劇団☆新感線である。まともにお金が回っている演劇はこの界隈くらいで、あとは社会と繋がるか公共と繋がるか助成金に頼るしかないのが、2019年の小劇場演劇の悲しい現実だ。そんな“小劇場演劇”と言われる（呼ばれる？）、いわゆるカネにならない、経済原理とかけ離れたところで活動する我々にとっての朗報は、演劇にも格差社会が押し寄せていることだろう。SNSの隆盛に伴い、集客の勢いが一極集中するようになった。その時期に話題になった公演や俳優、タレントに客が押し寄せる。一方、客の入らない公演や団体はサブカル化を極め、我が道を（という逃げ道）を進みはじめる。

…いや、この傾向は今に始まったことではないのかもしれない。昔からずっと構造は同じで、ただ、その話題性や口コミの多寡が、Web上でトレンドワードやハッシュタグとして可視化されるようになっただけなのだろう。だが、可視化された波は、どうしてだろうか、引くのも早い。流行った話題があつという間に消費されていく。だから、Web上で話題になり少しばかり集客の伸びた演劇団体は、目にも止まらぬ早さでサブカル化する。

日本の人口減少と“自分もやってる”人口減少

ここに、当たり前の日本の社会問題が押し寄せる。自分たちの作品をより多くの観客に見て貰おうと、劇場を大きくしたり公演日数を延ばしたりしたとしても、その受け皿となる中間層の観客がほとんどいないのだ。ただでさえ日本の人口は目減りしているといっているのに、その中の数少ない観劇人口の中の、タレント目当てのミーハーな観客と、コアな演劇好きとの狭間にいる、いたはずの中間層が今、非常に少なくなっている。中間層、「演劇に興味あるんだけど今面白いところはどこ？」という浮動票をいかに引き集めるかが、数年前までの演劇における集客手段の一つだった。しかしその母数が減っている。そして進む人口減少。小劇場演劇の観客の半分は演劇関係者だ。高校演劇、大学演劇、社会人演劇。“自分もやってる”人が観に来る。しかし進む人口減少。どんどん減っていく“自分もやってる”人。どんどん進む“自分もやってる”人口減少。

さて、これは、逆説的に朗報なのである。こと、小劇場演劇と呼ばれる界隈にいる人々にとっては。

なぜか？

“自分もやってる”人々はようやく、「演劇は食えない、そんなの常識誰でも知ってる。でも、それでも、そんな中でも自分だけは違う。自分だけは食えるようになる。なれる。なってやる」という神頼みレベルの呪縛から解き放たれたのだ。演劇は、食えない。でも何も悪くない。食えなくて良いのだ。だから自由なのだし、冒險できるんだし、集客が芳しくなくても内蔵売らなきゃいけないほどの借金は抱えないし、テレビドラマに出演して売れていく舞台俳優を「金に目がくらんで魂売りやがったクソポンコツ役者」なんて罵りながら酒が呑めるのだ。それで良いのだ。

…それで良いのか？ 飲み屋で貶したあの俳優は、自分なんかよりもはるかにたくさんの人に見て貰っているではないか。たくさんの観客を劇場に呼び込んでくれるではないか。その何がいけないのだ。たくさんの観客に見て欲しいのは、同じじゃないか。

ここで、ふと気付く。歌舞伎やミュージカルといった、お金が回っている演劇業界は、たくさんの観客に見て貰うことなどもはや当然のこととして、それ以上に、たくさんの観客を喜ばせることに苦心している。「観に来て観に来て」とばかり叫んでいた人たちとは、優先順位が決定的に違ったのだ。



古川貴義
(箱庭円舞曲)

観に来て欲しいのか？ それだけなのか？

たくさんの観客に“観て”欲しいのか？ それとも、たくさんの観客に“喜んで”欲しいのか？ この差は、紙一重のようでは根本的に違う。まず、欲求の主体が違う。たくさんの観客に“観て”欲しい場合、自分（の作品）を観に劇場に来て貰うこと、つまり集客という、やってる人側の欲求を満たすことが第一目的となる。対して、たくさんの観客に“喜んで”欲しい場合は、作品を観て貰うことは前提で、観たうえで、喜んで貰いたい、満足してもらいたいという、観客の欲求を満たすことこそが第一目的になる。これは、もはやサービス業である。芸術だアートだとほざいても構わないが、そもそも収入のベースが集客頼みの演劇の場合は、サービス業でもあるという側面は無視しようがないのである。欲求が満たされているのは、やってる人か、観客か。こう問い合わせれば、歌舞伎、ミュージカル、宝塚、そして劇団☆新感線のお客さんが押し寄せるのも合点がいく。否定すべくもない。比べる意味がない。

自分は、自分の携わる演劇を、観て欲しいのか。観て、喜んで欲しいのか。

あなたは、どちらですか？

…ずるいですね。

どちらもですか、ああそうですか、僕もです（笑）

古川貴義 (箱庭円舞曲)

レビュー



2019年2月9日(土)～11日(月)

IKSALON表現者工房三周年シリーズ市民参加「現代・リーディング5」

「路地裏海賊譚 カコノユクエ」

演出・脚本・構成:矢内文章 (アトリエ・センターフォワード)

出演:坂口修一、竹内宏樹(空間 悠々劇的)、

森田祐利栄(エイチエムピー・シアターカンパニー)、

飯田紀史、乾佐和子、加藤友子、木下颯太、桐生紗衣、

瀧下美紗江、真嶋秀典、宮澤弘一、YAKO(森林浴)、結木愛(イズム)

【解説】

もうお馴染みの感がある東京のアトリエ・センターフォワード矢内文章氏が、両国の「シアターX(カイ)」で上演した、自身の作品を、市民参加で演出した。リーディングにも関わらず、ミュージカルのような歌の場面があり、矢内作品ならではの活劇として仕上がっていた。



2019年3月2日(土)～3日(日)

タテヨコ企画第36回公演

「三人の姉妹たち」

作:横田修 / 演出:横田修+青木柳葉魚

出演:市橋朝子、館智子、西山竜一、向原徹、久行しのぶ(以上タテヨコ企画)

岩崎正寛(演劇集団円)、小野寺亜希子(テアトル・エコー)、

久我真希人(空觀)、坂口修一、田村かなみ

【解説】

毎回、部屋の中をきちんと作る舞台美術は、演出横田修氏と俳優陣・スタッフが作る。もちろんタイトル通りのチエーホフ作品のオマージュ的脚色は秀逸で、名作感が漂う。演出は半ばで青木柳葉魚氏にバトンタッチしたが、横田作品の無常感が際立つ作品となった。